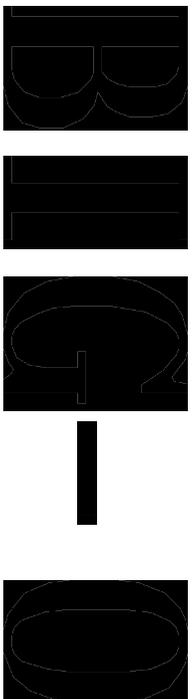


クロムガンナー



ACT:02

ドロシー・ドロシー

第三稿

脚本／小中千昭

Animation Play by Chiak J. Konaka

登場人物

ロジャー・スミス(25)……………ネゴシエイター

ノーマン・バーグ(64)……………ロジャーの執事

R・ドロシー(18)……………アンドロイド

ダン・ダストン(47)……………治安維持軍

ビッグ・イヤー(49)……………デイルの店にいつもいる情報屋
デイル(38)……………安酒場店主

ティモシー・ウェインライト(72)……………元科学者

ベック(22)……………誘拐犯首謀者
その部下達。

クラブ・ナイチンゲールのウェイター

治安維持軍警察隊
検問員

前回までのフラッシュユ

ロジャー「(モノ)私の名はロジャー・スミス。記憶を失った街
パラダイム・シティには必要な仕事、ネゴシエーターが
私のもう一つの名前だ。

つまらない人質誘拐事件のネゴシエーションかと思つた
が、今回の仕事はちよつとばかり厄介な事になつてしま
つた。そういった時には――、ビッグ・オーで乗り出す
までだ」

ビッグオー/コクピット

ロジャー「バイバイ、ドロシー」

摩天楼街

ドガアアアアン！ パイル・アームが火を吹き、
ドロシー1の背部から胴を貫いた！
動きが止まるドロシー1。

R・ドロシー「(涙が一瞬見える)ドロシー1……」

と！ ダストンが駆けつけてきて

ダストン「危ない！」

ドロシーの躰を抱えて走ろうとし――、その重さに
よろける。

ダストン「なっ……？」

ビッグオー/コクピット

スリット・ウィンドウからR・ドロシーとダストン
の姿が見えた！

ロジャー「ドロシー」何でこんな近くに」

摩天楼街

ドオオオオオオンニ
破するドロシー！

凄まじい量の破片がぶちまけられ――

ダストン「わああああっ！」

ズーン！ ダストンの眼前にビッグオーの脚が、突如巨大な壁が現れたが如きに。

爆風に晒されるのを逃れるダストン、安堵――。

ダストン「（嘆息）やれやれ……、ん……？」

見回すダストン。

ダストン「――今の女の子は――、どこへ消えたんだ……？」

と、ビッグオー、立ち上がり――、摩天楼の間の大通りを歩き去っていく。

ダストン「あッ、おい待て！（背後の部下らに）あいつの足を止める！ 法の秩序というものを思い知らせてやれ！」

摩天楼メインストリート

悠然と歩くビッグオー。

と、足元を数台の軍用車が駆け抜け――、ターンしてロケットランチャー（サイドワインダー）の照準をビッグオーに向ける。

ビッグオーノコクピット

ロジャー「（苦笑）命の恩人に礼儀知らずだな（脇のマイクに）ノーマン、戻るぞ」

球面ディスプレイに浮かぶノーマン――

ノーマン「承知致しました、ロジャー様」

ペダルを踏み込むロジャー！

摩天楼メインストリート

ゴゴゴゴゴ！ 巨大な脚が振り上がり、慌てて逃げ

出す軍警察部隊員。

ビッグオーの脚、アスファルトを割って、そのまま
巨体は地面の下へ潜っていく。

凄まじい噴煙で辺りは視界が遮られる。

駆けてきたダストン――

ダストン「くそ！ また地下か！」

苦虫を噛み殺した顔で、地面に開いた巨大な孔の前
に立ち、地団駄。と――

ロジャーの声「勇敢なる軍警察も、地下は怖い、と」

キツと振り向くダストン。ロジャーが噴煙の中から
現れる。

ダストン「ふざけた事抜かすな！ 地下のメモリーを持っている
奴をいつかきつと見つけだしてやる。その時があいつの
最後だッ！」

不機嫌そうに去っていくダストン。

ニヤニヤと見送るロジャー。

地下鉄路線

ドオオオオン！ 下ってきたビッグオーの巨体。

とうに使われなくなった地下鉄の線路上に乗った特
殊輸送貨車の上に横たわる。

鉄が軋む音が響き――、輸送貨車はトンネルの闇へ
消えていく――。

ドーム・ゲート

止めた車のところへやってくるロジャー、ふと振り
向き見回す。

ロジャー「（呟き）どこへ消えた？ ドロシー……」
車に乗り込みエンジンを吹かして――

ドーム外

アウト・オブ・シティへ駆けだしていくロジャーの車。ドームの外は今日も鉛色の空。

ロジャー「(モノ)この街は記憶を失った街。地下にかつて交通機関があつたらしいのだが、今地下にいるのはネズミと亡霊だけだ。迷い込んだら二度と外には出られない、と恐れられている迷宮。私はそれを利用している」

旧地下鉄路線

暗い廃トンネル内を、小さなライトを点灯させて進む、ビッグオー搭載輸送貨車。
より狭い支線に入っていく――。

アウト・オブ・シティ

精気の無い、朽ちたビル群が並ぶ街中を走り抜けていくロジャーの車。

途中で、建設用のロボットがビル解体工事をしているのが見える。ぼうつと見るロジャー。
やがて辿り着くロジャーのビル。

ロジャー「(モノ)あのドロシー――、いや、少女のアンドロイドの方だが、どうもおかしい」
フラッシュ/R・ドロシーの数ショット。

ロジャー・ビル/地下

支線のトンネルから抜けると――、そこは列車の展開場の様な、ターンテーブル状の空間。
輸送貨車、入って来て、地下よりアームが突き出し、ビッグオーを直立させる。

ビル一階

ブオン！ ロジャーの車がガレージに入り止まる。

ロジャー「（モノ）追われていたのは確かだ。狙撃もされた。しかし、ならどうして人質であったのに簡単に解放されたのだ」「このダイアローグは次のシーンにこぼし」

ロジャービルノビッグオー・ハンガー

斜めの坑道をスライドして上昇していくビッグオー。空洞となったビルの内側は、殆どがビッグオーのスペースであった。

ロジャー邸一階フロア

かつて銀行であった、ただ広い空間。ノーマンが出迎える。

ノーマン「お帰りなさいまし、ロジャー様」

居間

ソファに座り込むロジャー——、嘆息。

ロジャー「——ベックの本当の狙いはあの姉の方のドロシーにあった。それは間違いない。しかし……」

ビッグオー・ハンガー

唸っていた機器の音、止む。

静寂に包まれるビッグオー。今は休息の時——。

ロジャー・ビル外観

そこに巨大なロボットが居るなど、誰も知らない。

居間

窓から望める荒廃したビル群。その向こうには、ド

ーム・シティ。空は暗くなってきた。

ロジャー「——（呟き）クライアントは死んだ——、もう関係の無い事だ。忘れたまえ、ロジャー・スミス……」

自分に言い聞かせる言葉は、自身を納得し得ず。

アウト・オブ・シティノ夜の点景

もの寂しい街でも、夜の灯がぼつぼつと仄かに照らすと、まだそこが生きているという事が判る。

夜になると活性化するというタイプの人間はこの時代にも多い。そして、夜にならねば開けないタイプの店もある。

路地にロジャーの車が入ってきた。

カジュアルなスーツ（でも黒）に着替えたロジャーが、デイルの店に入っていく。

デイルの店

安酒場（スピーキージー）の店内は、昼間よりも当然ながら賑わっている。

カウンターの無口な店主に指を立てて合図し、ビールを受け取るロジャー。

いつもの席に座ると——

ビッググイヤー「昼間は五番街のドームで騒動があったらしい」

ロジャー「——そんな情報は誰だっけ知っている」

新聞を下ろし、ユダヤ老人の情報屋、苦笑。

ビッググイヤー「いまのは売り物じゃないさ、ネゴシエーター」

ロジャー「——あんな武装した大型ロボット——、どこかで掘り出して直したのか……」

ビッググイヤー「いや、あれはピカピカの新型さ。ミゲル・ソルダーノが、自分の工場をフル稼働させて秘密裏に作っていた、という話だ」

眉を上げるロジャー。

ロジャー「——そんな資金がどこから出たというんだ。それにそ

もそも、あんなものを作れる様なメモリーをソルダーノ
が——（合点）そうか……、やはりドロシーはアンドロ
イドだ。嘘をついてはいなかった……」

ビッグイヤー「メモリーってのはね、ロジャー。悪夢の様にふつ
と蘇って来るものさ。俺の様な老人だったらね。よなき
うぐいすのお話を知っているか？」

ロジャー「昔のおとぎ話か。たまには役に立つメモリーを思い出
したらどうだ」

ビッグイヤー「昔話じゃあないさ。ナイチンゲール。ドームの中
にいるそうだよ」

ロジャー「（呟く）ナイチンゲール……」

前話フラッシュ

ソルダーノ「ナイチンゲール……」

ふと細めで辺りを見回すロジャー。誰かの視線を感
じたらしい。折った札をビッグイヤーのテーブルに
置いて立ち上がる。

ロジャーの車。

アウト・オブ・シティの外れ。しかしここが最もい
かがわしい猥雑なエネルギーが夜になると溢れる。

ロジャー「（モノ）ソルダーノの最後の言葉、ナイチンゲール。

この街によなきうぐいすなどいない、と思っていたが、
最近はどうでもないらしい」

シックなネオン『*Nightingale*』が飾る、高級ナイ
トクラブが見えた。

ナイトクラブ・ナイチンゲール

ステージでは、露出度の高い衣装の踊り子達。

そこへ入ってくるロジャー。

と、慇懃なウェイター、脇に来て

ウェイター「どなた様かとお待ち合わせでしょうか」

ロジャー「（目は客席を見渡し）ドームの連中がお忍びで来る店らしいな」

ウェイター「当店は会員制です。どなたかのご紹介無きお客様には、ご遠慮申し上げます」

ロジャー「——」

帰ろうとしたロジャー、すれ違った二人連れを一瞥し——

ロジャー「——」

品の良い老人、それに付き添う若い女を見て驚く

ロジャー「——ドロシー……」

令嬢の如き服に身を包んだ淑女ドロシー、ロジャーを見る。

ロジャー「どこにいたんだ。あれから君は——」

と、令嬢、脅えた様に老人の後ろへ退く。

ロジャー「——」

前話フラッシュ

ドーム・ゲートの野次馬の中にいた老紳士。

老紳士「どなた様でしょう。私の孫娘を御存知とは」

ロジャー「孫……。このアンドロイドがあなたの孫だと？」

脅えた表情を浮かべているドロシー。

老紳士「紳士のなさる事ではありませんな。来なさいドロシー」

二人、フロアの方へ行く。

ドロシー、チラとロジャーに振り向き、すぐに視線を逸らす。

ロジャー「——」

おずおずとステージに立つドロシー。

ピアノリストの間奏に続いて——、美しい歌声が響きだす。

ピアノの脇で、本当に幸福そうな笑みを浮かべ、見つめている老紳士。

柱の陰で、じっとそれを見つめているロジャー。

ロジャー「(モノ)後で、夜なきうぐいすの昔話という奴を私は聞いた。機械仕掛けの鳥の歌声をありがたがる、どこかの国の皇帝の話だった——」

歌い終わり、拍手。老紳士は嬉しそうにお辞儀をし、ピアノリストにチップを渡している。

ドロシーは、チョコンと膝を折って挨拶をし、そそくさと舞台袖へ。

舞台袖

やって来る淑女ドロシー。

その前に立ちはだかるロジャー。

ロジャー「父親探しをしていたのか。育ての親がソルダーノなら、命を吹き込んだのがあのメモリーを持った老人だった訳だな」

冷徹にロジャーを見つめるドロシーは——Rの表情。

ロジャー「(嘆息)確かに君は、あのウエインライトという——」

と、背後から銃を突きつけられるロジャー。

ロジャー「——店の用心棒にしては、随分物騒だな」

横目で見るロジャー。

銃を突きつけていたのは誘拐犯グループ。ベックが脇でニヤニヤと笑っていた。

ベック「騒ぎなさんな、ネゴシエーター。これは簡単な取り引き

だ。このお嬢様を黙って渡せばいい」

ロジャー「あまりにアンフェアだ」

ベック「そうでもないぜ。見な」

ベックに促され、客席の方を見るロジャー。

ベックの部下が、心配そうにこちらを向いて立っている老紳士の脇に立ち、ポケットの膨らみを向けている。

ベック「あの爺さんのメモリーなんぞ、もう必要ない。殺さない

でやるのは、俺のフェアな精神からさ」

ロジャー「——私はプロのネゴシエーターだ。子どもでもこんな

不公平な取り引きは損だと考える」

ベックの部下、ドロシーの腕を掴んで引つ張る。

部下「くっ、何て重い奴だ」

ロジャー、引き戻そうと動くとき――

ベック「動きなさんなって。あの爺さん、そんなに殺したいか？」

ロジャー「――（苦笑）」

老紳士「ドロシー！」

ベック、部下を促しR・ドロシーを連れて行くこと
すると――

ガキツ！ R・ドロシー、部下の腕を擦じり、バツ

と駆けだして――

R・ドロシー「お父さま！」

ステージから飛び出すドロシー。

ロジャー「！ よせ！ ドロシー！」

部下「ベック！ どうしたらいいよ？」

老紳士を脅していた部下、走って来るR・ドロシー
に脅え――、老紳士を撃って、逃げ出す。

R・ドロシー「！」

凍る空気――。

無表情に立つR・ドロシーの頂に、ベックのスタン
ガンが当てられ――、崩れるドロシー。

ロジャー「！」

R・ドロシーの躰を三人がかりで運んでいくベック
の部下。

ベック「（嘲笑）またネゴシエーションに失敗したな」

ロジャー「（憤怒）――」

数十分後。

息絶えている老紳士の前に立つロジャー。

ダストン「ティモシー・ウエインライト――。北の外れで静かに
隠遁生活をしていた。メモリーを思い出すまではな」

ロジャー「――メモリー……」

ダストン「メガデウス級大型攻撃ロボットの設計図さ。アムネジ
アの前は、科学者だったらしい」

ロジャー「——孫がいたか？」

ダストン、「ん？」とメモを見る。

ダストン「いや——、娘はいたがね。四十年前のアレで亡くしている」

ロジャー「（一瞬、憐憫を目に）よなきうぐいす、か……」
ダストン「何だつて？」

表情を消して立ち去るロジャー。

ダストン「仕事はもう済んだんだな？ ネゴシエーター。変なところ、首を突っ込むなよ」

立ち止まり、

ロジャー「（振り向かず）未だ、終わっていないらしい——」
ダストン「何？」

ロジャー「——ベックが再びドロシーを狙ったのは何故だ……。あいつも——未だ本当の仕事を終えていないからだ」

ダストン「何を言つて——」

と、軍警察隊員が駆け寄り

隊員「ダストン隊長！ 西五番ドームで、あの巨大ロボットが再び暴れたしたとの連絡です！」

ダストン「莫迦な！ あれはもう動けないんじゃないのか」
出口へ走り出すダストン。

黙つて見ていたロジャー——、腕時計を開き、

ロジャー「（静かに、強く）ビッグオー！」

ロジャー・ビル／ビッグオー・ハンガー

眠れるビッグオー——、その目が輝き——、

ガクン！ 床面のシャッターが開き、突如凄まじい勢いでスライド降下していく巨体。

西五番ドーム

きらびやかな摩天楼の灯。その谷間に、巨大な影がゆらめき立つ。

ドームの裏手

暗い路地に停まっているワゴン。
それが、ギシギシと揺れている。

ワゴン庫内

アナログなスレーヴシステムをベックが身につけて
ジタバタ。躰中にスプリングだのワイヤー。
顔にはアナログなHMD。
ベック「くっ、動き難いぜ！ 今度こそ、原版を頂く」

摩天楼街

ギギッ ギギギッ 胸部にはビッグオーに開けられ
た孔。それでも動いているドロシー！。
軍警察車両が到着、ハンド・ミサイルを撃つ！
ドドーン！

ビッグオー/コクピット

暗い室内。球面ブラウン管に灯が入り——、細い線
が画面いっぱいになって——

『神の名においてこれを鑄造する。』

『汝ら罪なし』

震えだす室内。

摩天楼街

軍警察の攻撃をもとめせず、ドロシーは造幣局
の建物に向かって歩いていく。

ダストン「くそっ！ また造幣局を襲うつもりなのか？」

と——、地が震え始め——

どおおおおおん！

地を割って現れるビッグオーの巨体。

ダストン「(嘆息) 出たか……、メガデウス」

ワゴン車内

ベック「ちきしょう！ また出やがった！ 何者なんだよ！」

ビッグオー/コクピット

ロジャー「いたずらが過ぎるぞ、ドロシーお嬢様」

摩天楼街

ドロシー「凄まじい勢いでエクステンション・アームを振り上げ——、ビッグオーに振り下ろす！
がああああん！」

ビッグオー/コクピット

ロジャー「動力伝達の制御回路を失ってよく動けるものだ。しかし——」

ぐっ！ レバーを押し込むロジャー。

摩天楼街

ガン！ 反撃に出るビッグオー。

強烈なる鉄の拳を一撃！ 二撃！

ビッグオー/コクピット

ロジャー「これでお終いだっ！」

摩天楼街

三撃目を撃とうとしたビッグオーの動き、止まる。

ビッグオー／コクピット

ロジャー「！」

スリット・ウィンドウ越しに見える、ドロシー1の崩れ落ちた首周り（位置はデザイン如何）、その奥には――、眠れるR・ドロシーの姿が露出していた。

摩天楼街

見上げているダストン――

ダストン「どうした？ 何故トドメを刺さない？」

ゴゴ、ゴゴゴゴ、ドロシー1、ゾンビの様に両腕を振り上げ――、ビッグオーに襲いかかる！
引き寄せられ、締め上げられるビッグオー。

ビッグオー／コクピット

R・ドロシーの姿が近くに迫った。

激しい振動に揺られ、必死にレバーを掴みつつ

ロジャー「ドロシー！ ドロシー！」

ドロシーの躰は、ドロシー1の中に埋め込まれる様
にあり、無数のコードが巻き付けられている。

ロジャー「アンドロイドを――、ドロシーを動力制御回路に使っ
ているのか？」

前話フラッシュ

ビッグオー・コクピットからの視点

凍ったドロシー1、片腕を宙に掲げ――

ドーム外、ワゴン車内ベックの視点

R・ドロシーもまた、片腕を――。

ベック「(オフ)この人形、使えるぜ……」

ワゴン車内

ベック「へへへ、天才科学者の遺産は有効利用しねえとな」

摩天楼街

引き寄せるドロシーの力に抗しているビッグオー

——、突如その抵抗力を緩め——、

ガン！ 激突する二体の巨体ロボット。

ビッグオー/コクピット

ロジャー「くっ！」

前面のスリット・ウィンドウを渾身の力で押し開け

——、外に出るロジャー。

ジャンプ！

ドロシーの開いた胸部に飛び込む。

ドロシー1胸部

ロジャー「ドロシー！目を覚ますんだ！」

ドロシーの躰に結線されたコードを引き千切るロジャー。

ロジャー「君がドロシーだ！君自身でいる！」

R・ドロシー「ろ、じゃー……？」

ドロシーの躰を渾身の力で引き上げる。

躰中のコードが外れ——、

ワゴン車内

両腕両足をバタバタさせるベック。

ベック「ちきしょうっっ！」

ドロシー「胸部

ガクン！

ロジャー「！」

摩天楼街

力を失ったドロシー、崩れゆく！

ダストン「！ 回避だ！ 回避ーッ」

崩れ落ちる刹那、ビッグオーのコクピットへ飛び込むロジャーとドロシー。
どおおおおん！

ビッグオーノコクピット

未だ意識が混濁しているR・ドロシーを抱えるロジャー、崩れ落ちたドロシーを見下ろす。

ロジャー「——しかし——、相変わらず重いな、君は（苦笑）」

ロジャー、ドロシーのカチューシャに付けられている無骨な受信機を外し、

ドロシー「——ロジャー——、あたし……」

ロジャー「自分で言っただろう？ あたしを守れ、って」

ドロシー「……」

球面CRTにノーマンの顔。

ノーマン「ロジャー様、そろそろお暇を」

ロジャー「ああ、だがその前にやる事がある」

パネルの一つを開き、受信機のコネクタを差し込むロジャー。

アナログ・レーダーに反応。

摩天楼街

ググッ。ビッグオーの巨体が立ち上がり、ドームの外に向かつて歩きだす。

ダストン「ああッ」地下に逃げるんじゃないのかッ。そ、そのまま外に出ていくつもりかああッ」

ゲシッ。ドームの壁を破り、外へ出ていくビッグオー。

ワゴン車内

部 下「ベック！ ベック」

虚脱していたベック、HMDや躰のスレイヴ・システムをはぎとる。

ベック「馬鹿野郎！ こっちの居場所が知られちまった！ 早く逃げるんだよ！」

慌てて後部ドアを開ける部下――

部 下「わあああッ！！」

ドドーン！

ビッグオーの巨大な脚がそこに。

ビッグオー／コクピット

ロジャー「ネゴシエーションの相手に値しない者には、こうするまでさ」

グッ。レバーを引くロジャー。

ドーム外の路地

ワゴン車から逃げ出そうとするベック達。しかしビッグオーの巨大な手がそれを阻み――、ワゴン車を持ち上げる。

ワゴン車内

ベック「はっ、放せッ！ ちきしょうっっ！！」

ドーム外路地

サイレンを鳴らし、軍警察車両が急行してくる。
ビッグオー、振り向く。

サーチライトに照らされるビッグオーの姿。

車から飛び出したダストン——

ダストン「何を持つてるんだ？」

ビッグオー、身を屈め——、ワゴン車を軍警察車の
前に——放る。

ゲシツ。前部を潰して地面に突き刺さるワゴン車。

室内からはスレイヴ・システムの機器がボロボロと
転がりだす。

ダストン「——こいつらが犯人なのか……？（見上げ）」

見下ろしていたビッグオー——、背を向け——、

ズズズン！ 地響きと共に地下へ下っていく。

呻くベック達。

ベック「（苦痛）——俺の——ロボット……」

ダストン「（部下に）全員逮捕だ。病院なんか入れる必要ない」

ロジャーの部屋 / 翌日午前

テラスに立つロジャー。

虚ろな目でドーム街を見つめる。

ロジャー「（モノ）獄中であっさり自白をした、ベックのクライ
アントはウエインライトだった。メモリーを思い出して
しまった科学者。亡くした自分の娘を機械によつて再生
する、その資金の代償が、ドロシー1の設計だった。チ
ンピラのベックにあっさりと裏切られたウエインライト
だが……、アンドロイドの歌声を再び聴けた彼は、束の
間の幸せを得られたのだろうか。それが本当の娘など
はないと判っているながら……。

ソルダーノはどうだったろう。彼もまた死ぬ間際に、ア
ンドロイドを娘と呼び——。

よそう。これ以上は私の仕事では、ない」

と、背後からノーマンの声。

ノーマン「おはようございます、ロジャー様」

振り向くロジャー。

真つ黒な執事服のノーマンの脇に、真つ黒なワンピースを着せられたドロシー。

ロジャー「ノーマン、ええとこのアンドロイドの服は……」

ノーマン「お世話をする仲間が増えて、わたくし喜んでおります」

ロジャー「ちよつと待て。ドロシーと一緒に住むというのか」

ドロシー「いたくているんじゃないわ。他に行くところがないからよ」

ロジャー「（深い嘆息）——この家にはルールがあるんだドロシー。ここにいるなら、それを一つ一つ守る義務がある」

ドロシー「どんなルール」

ロジャー「その1。この家にいる者はみな、服は黒い色を着る」

ドロシー、ロジャーとノーマンの服を見比べ

ドロシー「あなたたちの服の趣味、最低だわ」

つづく